

「わたしがあなたを選んだ」 ヨハネ福音書 15 章 16 節

安藤 脩

10月の予定表を見て、11日の礼拝説教者の“安藤”って誰だ？と思われた方も多数おられるのではないのでしょうか。この度は、コイノニアで先生方も多く韓国に行かれるということで、洪先生から礼拝の奉仕を依頼されたのでした。私が予定表に記されている安藤脩です。結局、コロナウイルスのためにコイノニアは中止になったので、再度お伺いをしたのですが、予定通りということで、講壇に立たせていただいております。

何十名かの方々とは前からの知り合いです。それは以前、この土浦めぐみ教会で主催したイスラエル旅行に参加させて頂いたからです。義母の石谷茉莉が「牧師さんなら一回ぐらいイエス様が歩まれたイスラエルの地を見た方が良い」と誘ってくれたのでした。その時のお仲間が沢山います。清野先生とはそれより遥かに昔から知り合いです。清野先生ご夫妻がインドネシアの宣教師だったころ、義父の石谷類造もジャイカの働きでインドネシアにおり、わたしを招いてくれたのでした。その時、清野先生ご夫妻に2週間、インドネシアのあちこちを案内していただいた時からのお付き合いです。

私は30歳から伝道者として奉仕するようになり、2年半前、信仰の流れ、伝道姿勢において同じ、心にかなう後任者が与えられたことにより、43年間の伝道者としての現役を退きました。連れ合いの両親・石谷が住んでいたつくばの地を終の棲家とし、ここ土浦めぐみ教会で礼拝を守らせていただくようになりました。これらは皆、自分で決断して歩んできたことです。

今までの人生の道のりで、多くの決断をしてまいりました。人生を左右するような大きな決断もあれば、決断と意識しないで下している決断もあります。皆さんも同じでしょう。今ここに居るのだから、自分で行こうと決めてここに居られるのでしょうか。ところで、人は1日に何回決断しているかご存知ですか。私が以前読んだものには、「人は1日に9,000回決断している」と書いてありました。「すごいなー、そんなに決断しているかなー？」と思いました。でも今回、スマホのインターネットで調べてみると、この9,000回というのには根拠がないのだそうです。「そうだろう、そうだろう！」と思って、更に見たら、

9,000 回どころか、人は 1 日に 35,000 回決断しているのだと書いてありました。

私たちが生きるということは選択、決断の連続です。皆さんも今日既に、幾つもの選択と決断をした事でしょう。目覚めて、起きようか、もう少し布団の中にいようか？トイレが先か、顔を洗うのが先か？今日はどこにも行かないから髭剃りしなくても良いか！いや、今日はインターネットでの礼拝じゃなく教会に行って礼拝を守るのだから、ちゃんと髭剃るぞ！服は何を着ようか。今日は少しひんやりするから長袖にするか、でも、昼からは暑くなると言っていたから半そでの方がいいかなー、紺色の？やっぱり白だな。朝ごはん何にしようか？ごはんそれともパン、コーヒーそれとも紅茶、やはり緑茶がいいか。昨日の残りの味噌汁、いや、ポタージュスープが良いな。タンパク質にはハムエッグでも作るか。いつまで言ってもきりがありませんね。そして今言っているのも大雑把です。もっともっと、細かく色々考え、選択し、決断しますよね。自動車を運転して出かけるとなれば、どのコースで教会に行こうか？だけじゃなく、アクセルペダルとブレーキを小刻みに踏み、又、踏みかえ。ハンドルも右に左に一時も油断せず動かしている。きっとこれらは 1 秒ごとに頭は選択決断していると言っても過言ではないのかもしれない。習慣的な決断もあれば、常とは異なる選択も出来るわけです。決断は個々人の意志によるものです。他人からのお誘いが有ったり、言葉がけ、強制的に見えることが有ったとしても、やはり最終的にはその人自身が決断しているのですよね。神様が私たち人間にお与えくださった自由意志、これは神様でさえも犯すことは出来ません。ですから、イエス様を裏切り、売り渡したイスカリオテのユダに関して、「わたしと一緒に手を鉢に浸した者がわたしを裏切ります。人の子は、自分について書かれているとおりに去って行きます。しかし、人の子を裏切るその人はわざわいです。その人は生まれてこなければよかったのです。」(マタイ福音書 26 : 23~24)と、主イエス様は心では涙を流しつつ、ご自身の十字架は預言の成就であったとしても、ユダの行為はユダ自身が責任を取らねばならないことを語っています。自由意志、それによる決断はそれぞれが責任を取らねばならない厳しいものです。そして私も全てを自分の意志で選択し、決断してきましたし、

そのつもりでした。そう、全能なる唯一の愛の神様が居なければ、そうなのです。しかしそうではなく、自分の決断に先立つ神の選びと導きがあったことを、洗礼式の時、私は示され認めました。「人の心には多くの思いがある。しかし、主の計画こそが実現する。」（箴言 19 : 21）

私は鹿児島県の片田舎に生まれました。私の家は貧しくはありませんでしたが、さして豊でもありません。私は7人兄弟の末っ子で、兄たちも皆大学に行っており、私も何となく大学には行かないとなーと漫然と考えていました。でも年老いた両親にあまり負担はかけたくないという思いもありました。そんな時、高校に防衛大学に来ませんかと勧誘があったのです。鹿児島は軍人氣質の強い県です。それに防衛大学は学費も生活費もいらぬということが私には魅力でした。それで私も高校での学びに張り合いが出て、熱心に学びました。高校3年の1学期までは、防衛大学に行くつもりで学んでいたのです。しかし2学期が始まった時でした。何故か、歌を歌いたくて、歌いたくて、その衝動が止められないのです。音楽室に音楽の先生に会いに行きました。1年と2年の時は芸術科目・書道、美術、音楽の中から音楽を選択していました。でも芸術科目がなくなった3年の時、音楽の先生はその年赴任した新しい先生に代わっており面識がありませんでした。初めて会う先生に、「今から音楽の道に進みたいのですが、ピアノを教えてください。」と言いました。ピアノなど弾いたことのない自分ですから、心の中では、「今からピアノの練習では到底無理よ！」と断られるだろうと思っていました。なのに、その先生は「いいわよ！大学の音楽科を受けるならピアノだけじゃなく、楽典や声楽のコーリューブングン、コンコーネ、新曲を歌う練習などもやらないとね！」と行ってくださったのです。それから、朝は5時半に学校へ行き、守衛さんから音楽室の鍵を借りてピアノの練習をしました。友達が来る頃には、普通に教室に行っていました。午後は音楽部の女性の生徒たちが帰った後、午後9時ごろまで練習させてもらいました。今思っても、先生もまあよく受け止めてくださったものだ！。また、学校も良くそのような我がままを許してくださったものだと思いません。後になって音楽の先生に「なぜ、あんな無謀な申し出を受けてくださったのですか？」と尋ねたら、「前任の先生がね、『もし、安藤という生徒が、音楽

の道に進みたいと言ってきたら、受けて、指導してくれませんか。』と言いついて行ったのよ。」と話してくださいました。

ピアノの練習は最も初歩のバイエルからです。でも2ヶ月経ち11月、ハ長調も終わらないうちに受験しようと思う大学の試験曲が発表されました。課題曲はチェルニー30番のうちの23番、ベートーベンとモーツァルトとハイドンのソナタの内より1曲を選曲でした。先生がソナタはハイドンの曲が一番易しいようだから、これにしましょうねと決めてくださいました。その練習に没頭しました。声楽のコーリューブングンの練習もハ長調しか練習し終わらないうちに2月の受験日になってしまいました。先生からは「十分ではないけど、よく頑張ったわ！コーリューブングンもハ長調以外から出題されたら、今年は運がなかったのだと諦めなさいね。」と言われて送り出されました。先生の出身大学・宮崎大学の試験ですから、コーリューブングンだってハ長調が出されることなどないと知っていたのでしょうか。私が不合格になっても、「運がなかった」と衝撃を最低限に抑えようとの言葉がけだったのだらうと思います。

学科の受験は・・・まーまーかなと思いました。

音楽の楽典も皆書けました。実技の・・・新曲は何となく歌いました。

問題のコーリューブングンはフラット♭が2つ付いた変ロ長調です。

でも、運はありました。5人ずつ部屋に通されたので前に歌った2人の人の歌声が、衝立越しに漏れ聞こえてきたのです。全く知らない曲、ハ長調ではない曲だなーと分かりましたが、試験官に楽譜を渡されて見てみると、何となく歌えました。最後の日がピアノの試験です。音楽をなさる人なら誰でも知っているでしょうが、チェルニー30番の23. 右手と左手が3度音程の違いで同じように動く曲です。でも、右の手が左手より少し早く進んで合いません。弾くののを止めました。もう一回、弾き始めました。同じようにズレてしまいます。また止めました。3回目弾きだしても同じようにズレてしまいましたが、もう止められないと、そのまま弾き続けていたら、途中から合いだしていました。ハイドンのソナタはどう弾いたかも覚えていません。最後まで弾き切らず、途中で、「ハイそこまで！」と止められてしまったことだけが強く残りました。嗚呼ーあ、ダメだった。不合格は確定的と思いました。合否は5日位後に電報

で知らせてくることになっていました。電報が来たのです。「合格」と書かれていました。でも私は、何かの間違いだ！明日にでも「申し訳ありませんでした。あなたの前（後）の受験番号の人と誤って通知してしまいました。」と連絡してくるのではないかと、本気で思っていました。でもそのようなこともなく、入学式を迎え、やっと安心したのでした。

大学では寮生活になりました。ある日、同室の4年生の先輩が、「安藤君、今日、新入生の歓迎コンパがあるから一緒に行こう！」と誘ってくださいました。宮崎大学キリスト者学生会という会主催の歓迎コンパでした。そこで初めてキリスト教なるものに接しました。そこで聖書（ギデオン協会の分冊）をもらい、初めて聖書なるものを読みました。私はこの会の雰囲気良かったのでその後も参加し続けました。しかし、私を連れて行ってくれた先輩は、この時の1回きりで、その後は行きませんでした。かえって私が「先輩、時には一緒に行きましょうよ。先輩が連れて行ってくれた集会ですよ。」と何回誘っても行きませんでした。

私は聖書・マタイによる福音書を読み始めて、すぐに自分の罪を示されるようになりました。「わたしはあなたがたに言います。兄弟に対して怒る者は、だれでもさばきを受けなければなりません。兄弟に『ばか者』と言う者は最高法院でさばかれます。『愚か者』と言う者は火の燃えるゲヘナに投げ込まれます。」マタイの福音書 5：22 「わたしはあなたがたに言います。悪い者に手向かってはいけません。あなたの右の頬を打つ者には左の頬も向けなさい。」（マタイ 5：39）これらの聖句は衝撃でした。小学校6年生の時、友達に注意し、喧嘩になりました。その時、下敷きそれもアルミ製の下敷きで相手の頭をたたいてしまい、彼は血を流し、病院に連れて行かれました。その時、もう決して喧嘩はしないと心に決めました。それ以前はやんちゃなところもありましたが、その時以来、喧嘩をすることなく、小学6年、中学3年、高校3年と1日も休むことなく皆勤出席。ある程度勉強もできてということで、周りからも、「おさむちゃんは模範少年」と見られるようになっていました。自分でも真面目で正義感の強い者と自負していました。だからでしょう、心ではいつも、誰かが悪さをすると「何であいつは、あんな馬鹿げたことをやっているのだろう。」

と他者を批判し裁いていたのです。でも自分は罪を犯していないかというところではありません。母が小銭のおつりがある度に竹筒に入れていましたので、時々そこから、5円、10円と盗み取り買い食いをしていました。それどころか、夏、友達と一緒に海に行くとき、自分の家の畑は遠いので、道沿いの畑からスイカを頂戴して、海でスイカ割をするというようなことまでしていました。その頃、罪意識はあまり感じていませんでした。自分も悪をなしていながら、他の人を裁いている。なんという傲慢な者だったのでしょうか。聖書を読むようになって、傲慢で罪ある自分を初めて強く認識しました。

『姦淫してはならない』と言われているのをあなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。情欲を抱いて女を見る者はだれでも、心の中ですでに姦淫を犯したのです。もし右の目があなたをつまづかせるなら、えぐり出して捨てなさい。からだの一部を失っても、全身がゲヘナに投げ込まれないほうがよいのです。」(マタイ 5:27~29)の聖句にはどうしようもない自分を感じました。年頃ですから、美しい女性を見るとムラムラとした気持ちが湧くこともありました。「しまった。聖書なんて読まなければよかった。聖書を読まなければこんなに苦しまなくても良かったし、罪悪感も感じなかったのに！」と思いました。それで、精神を鍛えるつもりで、座禅のまねごとをしたり、大学の茶道部に入りました。茶席にいる時は雑念なく心が澄みました。しかし、一歩外に出ると元の木阿弥、少しも変わっていない自分がいました。

大学1年の9月になって、ついに降参して、教会に行きました。それまでキリスト者学生会の先輩から教会に誘われても、こっちの先輩を立てれば、あっちの先輩に失礼なのでなどと理屈をつけて、教会に行かなかったのです。教会に行きだしたら、欠かすことなく毎週行きました。聖書も更に読みました。1年近く礼拝に出席したころ、牧師先生から「もうそろそろ洗礼を受けませんか。」と声を掛けられました。確かに自分が罪人であることは認識していました。そして、体験上、自分の修業努力では自分の罪を取り除くことが出来ないこともわかっていました。だからこそ、イエス様が私の罪を背負って私の身代わりに裁きを受けてくださった。このお方を私の救い主キリストと信じ受け入れるならば、私、の罪は神様の目から消される。イエス様が命をもって贖って

くださったのだ。ということも理屈ではわかっていました。でも、実感がない
というか心が納得しきれなかったのです。それで、牧師先生には、しばらく考
えさせてくださいと言いました。そして祈りました。考えました。答えが出る
までにたいして日数を要しませんでした。「今まで犯した罪は解決しようがない。
自分の心と行動には、自分で出来る限り修業努力してみた。でも自分を変
えることはできなかった。もし、洗礼を受けて変わらないとしても元々だ。で
も、もし、聖書が言っているように変われるのなら何とハッピーだろう。」私
は少し賭けをするような思いで、洗礼を受けることを決意しました。二十歳の
誕生日でした。

洗礼を授けていただき、讚美のうちに立ち上がろうとしたその一瞬に、今ま
で話したようなことが走馬灯のように脳裏を駆け巡りました。私が高校3年の
2学期になって、なぜ歌を歌いたい衝動をどうしても止められなかったのか。
なぜ、全くの初歩から僅か4ヶ月ほどのピアノ練習で、大学の音楽課に到底合
格するはずがないのに、合格通知を得たのか。キリスト教とは全く関係のない
寮の先輩が、なぜ、キリスト者学生会の新生歓迎コンパに連れて行って下さ
ったのか。今でも解りません。でも讚美の中で立ち上がったその時、「あなた
がたがわたしを選んだのではなく、わたしがあなたがたを選び、あなたがたを
任命しました。それは、あなたがたが行って実を結び、その実が残るようにな
るため、…」(ヨハネ 15:16)との聖句が「あなたがわたしを選んだのではない。
わたしがあなたを選んだのである」と、心に光を放ったのです。

皆さんも今まで多くの決断をして来られたことでしょう。もし初めて、今日
この教会に来られた人がおられるなら、友達に誘われたからというのであった
としても、あなたが決め、行動したことです。でもその前に神様があなたに目
を留め、あなたを愛をもって選び、導いてくださっているということを忘れない
で欲しいのです。神様はあなたに命を与えて下さっただけでなく、あなたが
あなたらしい実を結んでくれることを願っておられるのです。そのためには、
苦しいこともあるかもしれませんが、その時こそ祈るのです。「あなたがたが
わたしの名によって父に求めるものはすべて、父が与えてくださるようになる
ためです。」(ヨハネ 15:16 後半)とあります。その時、あなたは生きているこ

との幸いと、充実感を味わうことができるでしょう。